

ヤマブドウ *Vitis coignetiae* Pulliat ex Planch.

ブドウ科 Vitaceae

1. 分布：北海道から九州の山地および原野。

2. 植物体：木本性蔓植物で他物に絡みついて高くよじ登り（A）、茎は直径10cm以上に肥大する。当年枝は緑色、部分的に赤みを帯びる。2年枝以降は周皮が作られ褐色、太い蔓の樹皮は灰色～褐色、縦長の膜状に剥がれる（B、C）。初夏に、房状に小さな両性花を咲かせ、秋に黒熟した実は食べられる。

3. 利用可能部位：樹皮、若齢部の蔓

組織形態：

〔樹皮〕形成層から、篩管・伴細胞・柔細胞の集まった部分（篩部の塊）と厚壁で断面長方形の繊維細胞が整然と隙間無く集まった部分（繊維細胞の塊）が交互に作られ、それぞれが同心円の層をなす（図E）。これを木部から連続する大きな放射組織が放射方向に区切っている（図F）。その結果、篩部の塊、繊維組織の塊はそれぞれ断面長方形となる（図F、G）。放射組織は幅10細胞以上で背が非常に高く、柔細胞からなり、ときおりひととき大きな結晶細胞が混じる（図H）。この細胞内には多数の針状の結晶が束になった束晶が入っている（図I、J）。

〔当年枝の茎（蔓）〕断面は不整な多角形型をしている（丸くない）。大きな髄腔と多数の一次維管束が一輪に配列する（図K）。表皮は薄く、クチクラは薄い。維管束は断面楕円形で互いに接して配列し、髄腔側に一次木部、表皮側に半円形の一次篩部があり、その間に二次木部が作られ始めている。一次木部の後生木部道管は一本の維管束あたり1、2本である。

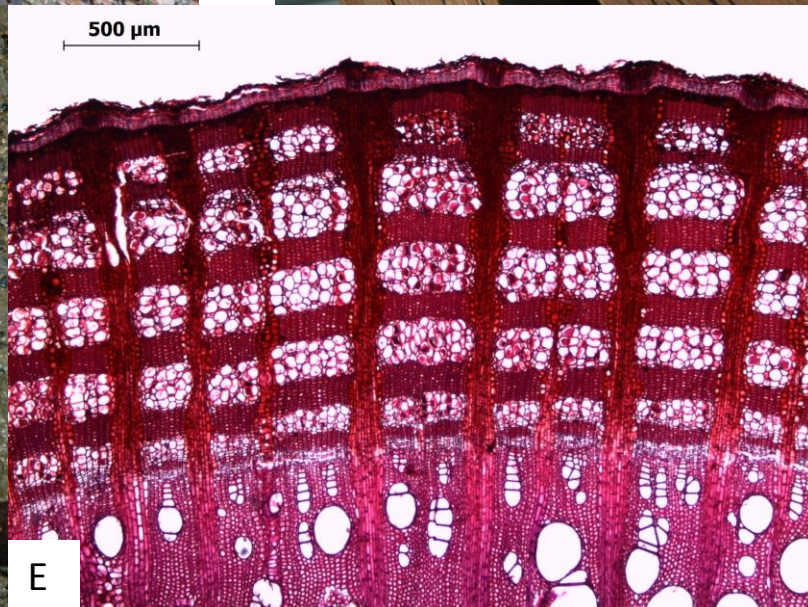
利用例：

・樹皮のカゴ編物

遺跡出土遺物：

〔樹皮〕 縄、カゴ編物

〔若齢の茎（蔓）〕 結束紐



A: ヤマブドウの太い蔓。**B:** 縦に裂け、厚めに剥げる樹皮。**C:** 蔓の断面。内側の淡色部分が木部、ぬめりのある樹液が出ている。その外側の褐色部分が樹皮。下に剥がれているのは外樹皮部分。**D:** 上からヤマブドウの当年枝、2年枝、数年を経た蔓。**E:** ヤマブドウの二次木部（下約1/3）、形成層、樹皮の横断面。篩部の塊、繊維の塊が交互に層状を無し、それを幅広い放射組織が縦に仕切っている。



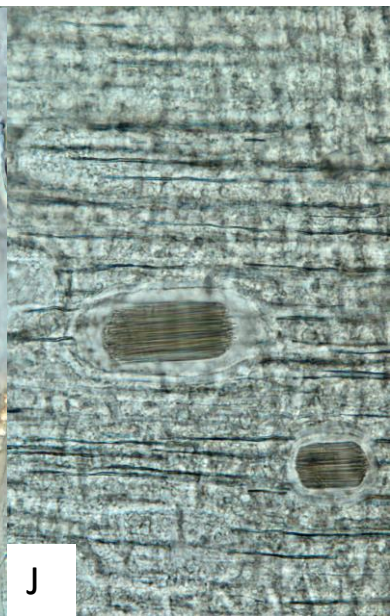
F



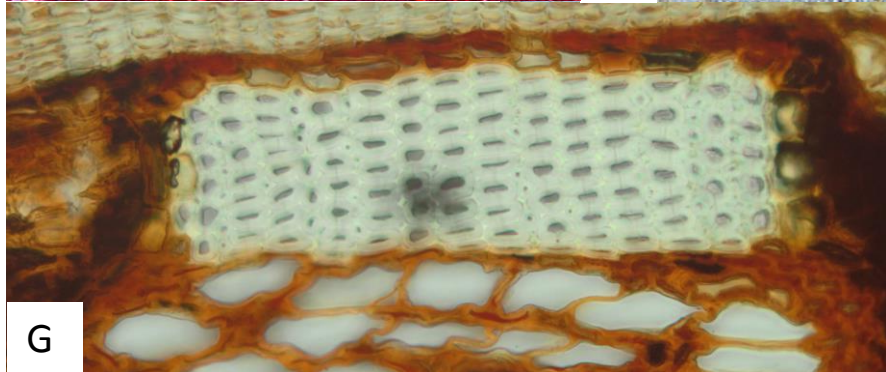
H



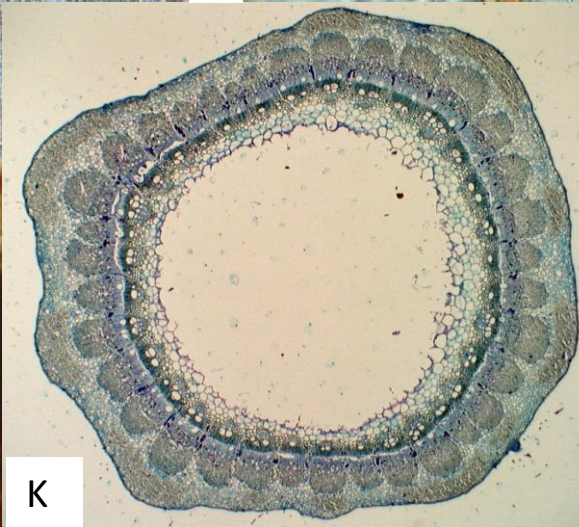
I



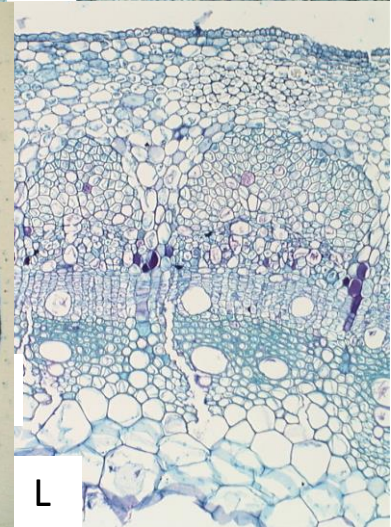
J



G



K



L

F: 樹皮の横断面の拡大。接線方向に長軸のある長方形の繊維の塊と篩管・伴細胞・柔細胞からなる篩部の塊が交互にある。幅広い放射組織がそれをタテに仕切っている。最外部に外樹皮(コルク層)がある。G: 繊維組織の拡大。断面長方形の厚壁の繊維細胞が密に整然と並んでいる。H: 樹皮の接線断面。非常に大きな放射組織で中に断面が円形の大形の結晶細胞が混じる。I: 放射組織の中の大形の結晶細胞の中央にある断面観が丸い束晶。J: 放射組織の放射断面。洋酒樽型の大きな細胞中に針状結晶が多数集まった束晶が入っている。K: ヤマブドウの当年枝の横断面。大きな髓腔と一輪に配列する多数の一次維管束がある。L: 当年枝の横断面の拡大(一部)。維管束は断面楕円形で、髓腔側に一次木部、表皮側に半円形の一次篩部があり、その間に二次木部が作られ始めている。